

2018年度第1回 市民講座を開催しました。

テーマ【カミングアウトについて ～そのメリット・デメリットを考える～】

2018年7月22日(日)、今年度第1回市民講座を、蛍池公民館第二集会室にて開催致しました。折からの猛暑の影響もあり、参加者の数は少なく終わったのですが、それでも「災害と認定する」とまで報道されるレベルの猛暑の中、参加して下さった方々には、心から感謝しております。

さて、今回のテーマは【カミングアウトについて】ですが、近年、発達障害やLGBTなど、自分の障害や属性をカミングアウトする人が増えてきました。テレビ等のメディアでもよく聞かれる言葉となり、いわゆるマイノリティーに属する障害当事者を支援する団体にあって、一度取り上げてみようと思いました。

第一部では、東京にある「NPO法人バブリング」代表理事の網谷勇氣さんより講演していただきました。

そして第二部ではパネルディスカッションが行われ、大阪市大正区にある「自立生活センタースクラム」代表の姜博久さん、当センターピア・カウンセラーの瀧本・根箭がパネラーを務めました。コーディネーターは、当センター管理者の上田が務めました。

★網谷勇氣さん講演

「バブリング」は、カミングアウトがテーマになった活動をしているNPO法人です。目に見えにくい生きづらさを抱えている人に対して、カミングアウトという行動を通じて、生きづらさの見える化と、生きづらさの構造を確認していこうという活動をしています。

網谷さん自身は、セクシャルマイノリティ（ゲイ）です。

最近よく聞かれる【LGBT】は、L=レズビアン、G=ゲイ、B=バイセクシャル、T=トランスジェンダーの頭文字なのですが、それぞれどんな属性なのか、おおよその分類を以下に説明します。

①L=レズビアン

レズビアンとは、身体の性はともかく、自分が認識している性と恋愛対象の性が共に女性、という人を指します。従って、次の2パターンが存在します。

- ・ 身体の性が男 + 心の性が女 → 恋愛対象は女性
- ・ 身体の性が女 + 心の性が女 → 恋愛対象は女性

②G=ゲイ

ゲイとは、身体の性はともかく、自分が認識している性と恋愛対象の性が共に男性、という人を指します。従って、次の2パターンが存在します。

- ・ 身体の性が男 + 心の性が男 → 恋愛対象は男性
- ・ 身体の性が女 + 心の性が男 → 恋愛対象は男性

③B=バイセクシャル

バイセクシャルとは、身体の性と心の性はともかく、恋愛対象が男性も女性も両方、という人を指します。従って、次の4パターンが存在します。

- ・ 身体の性が男+心の性が女 → 恋愛対象は男性・女性
- ・ 身体の性が女+心の性が女 → 恋愛対象は男性・女性
- ・ 身体の性が男+心の性が男 → 恋愛対象は男性・女性
- ・ 身体の性が女+心の性が男 → 恋愛対象は男性・女性

④T=トランスジェンダー

トランスジェンダーとは、恋愛対象はともかく、身体の性と心の性が不一致である場合を指します。恋愛対象については、同性愛・異性愛・両性愛のいずれもが当てはまるので、次の6パターンが存在します。

- ・ 身体の性が男+心の性が女 → 恋愛対象は男性
- ・ 身体の性が女+心の性が男 → 恋愛対象は女性
- ・ 身体の性が男+心の性が女 → 恋愛対象は女性
- ・ 身体の性が女+心の性が男 → 恋愛対象は男性
- ・ 身体の性が男+心の性が女 → 恋愛対象は男性・女性
- ・ 身体の性が女+心の性が男 → 恋愛対象は男性・女性

トランスジェンダーと、レズビアン・ゲイ・バイセクシャルは、重複している部分があります。身体の性と心の性が不一致なので、心の性と恋愛対象の性は、同一の場合もあります。

また、トランスジェンダーの内の一部は、身体と心の性が不一致ということが根拠となる、「性同一性障害」という診断を受けています。

従って「性同一性障害=トランスジェンダー」ではなく、トランスジェンダーという大きな括りの中に、性同一性障害と診断された人がいる、というのが正しい認識となります。

☆世界を“打ち明けられる”でつくりたい

NPO法人バブリングの基本コンセプトとしては、「目に見えにくい生きづらさを抱えている人が、自分のマイノリティの要素（内容）と向き合い、打ち明けるといふ選択（意思決定）をした時に、カミングアウトすることが出来る世界、また、大切な人から何か抱えているものを打ち明けられることが出来る社会を作りたい」というものです。



「大切な人へのカミングアウトを応援する」ことを、使命として掲げています。

日頃から、カミングアウトストーリーを掲載するという活動をしており、これは目に見えない何かを抱えている人を、バブリングで探して見付けては当人にインタビューを依頼し、承諾を得られればインタビューに赴いて、聞いた話を記事にして発信するというものです。

直近でインタビューをした人は在日韓国人でした。記事はWeb上でアップしますが、それを中心におこなっているのが、【普及啓発事業部】です。

また、いろいろなマイノリティを体感する（参加者がマイノリティの感情にリアルに迫ってみる）ワークショップを開催しています。

ワークショップは「なりきりワークショップ」という形で実施されており、やり方としては、たとえば4枚のカードを用意して、参加者がその中から1枚を選びます。

カードにはそれぞれ、「発達障害」、「社会的擁護の経験者」、「セクシャルマイノリティ」、「吃音」と書かれており、自分が引いたカードに書かれている内容の当事者について、自分でいろんな手段で調べます。そして、その当事者になり切ったつもりで、カードの答えは言わずにコミュニケーションを取り、どういう関わりをされたら当人がカミングアウトしたいと思えるか、逆にこういう関わりをされたことで、カミングアウトを拒否して心を閉ざすというのを、体験して考えてみるのが、ワークショップの目的です。学校などに出張しての開催もやっています。

そして、毎週日曜日 19:00 より、新宿ゴールデン街にあるバーを借りた「バブリングバー」というのを営業しています。

このバブリングバーは、「思いがけず世界が深まるバー」をコンセプトにしており、月～土曜はオーナーが雇っているアルバイトの人によって営業されている普通のバーですが、日曜日のみ、バブリングのコンセプトで営業しています。平日のお客や、観光客も利用しており、ネットで検索して見つけた人も来ています。多様な人たちが「ここでなら話せる」と思える空間作りを目指しています。これらは【コミュニケーション事業部】によって行われています。

さらに、2015年より、毎年10月11日を「カミングアウトデー」と設定し、ありのままの自分をカミングアウトした人をゲストに招き、トークセッションなどのイベントを開催しています。10月11日をカミングアウトデーとしたのは、アメリカでこの日が「国際カミングアウトデー」と設定されていることに因んでいるそうです。日本ではあまり知られていません。

バブリングのスタッフの中には、普段は学校の先生をしている人がおり、年に1回、セクシャルマイノリティについて話をする授業をしています。その中で、生徒の1人がゲイであることをカミングアウトし、その生徒と先生（バブリングのスタッフ）による対談を、昨年行いました。

毎年いろいろな切り口で、セクシャルマイノリティや難病、疾患などのカミングアウトについて語り、考える活動をしています。担当しているのは【カミングアウトデー事業部】です。

以上、3つの事業部が、NPO法人バブリングにはありますが、代表理事である網谷さんを含め、約20名いるスタッフ全員が、ボランティアで働いています。

☆マイノリティへのアプローチより、マジョリティへのアプローチ

今、一番活動の対象として力を注いでいるのは、「見えない生きづらさを想像出来る大人を増やしていこう」というものです。マイノリティー当事者へのアプローチというよりは、当事者からいろいろな話を聴くことによってマジョリティに対して情報発信をしていき、社会の意識を変えていこうとしています。特に教師など、子どもと関わる仕事をしている人たちにアプローチを掛け、気付きの機会を与えることで、もしその子どもが何らかのマイノリティ要素を抱えることになった時、また既に何らかのマイノリティを抱えている時、大人が適切に関わって、必要なサービスを創出出来る可能性が生まれてきます。また、日々のバブリングの活動や、スタッフ自身がどういう当事者性（属性）があるかということも、法人のコラムで発信しています。

カミングアウトに最初からオープンだった人もいれば、最初は慎重になるも徐々にカミングアウトした人もいて、そういう人たちの「カミングアウトまでの軌跡」も、コラムで発信しています。

カミングアウトをすることで、その当事者の属性(マイノリティ)に対する、社会の本音(正体)が見えてくることになるので、そこから社会へのアプローチが始まっていくことになります。

☆網谷さんのライフストーリー

網谷さんが初めて「自分はゲイだ」と認識したのは、中学生の時です。同性の同級生ほど女性に興味がなく、一方で男性には興味があると感じたので、「これは何なんだろう?」と思い、辞書で「同性愛」という言葉を調べたりしましたが、当時は「同性愛＝異常性愛」と出てくる時代でした。「異常」という言葉に対して強くショックを受け、大学時代までずっと悩みました。また、喋り方や仕草が原因で、中学生時代はイジメられていた時期もありましたが、同時に友達も多かったそうです。

当時の網谷さんは、「いずれ高校生とか、もっと大人になったら、同性愛も治って、普通の異性愛者になるんじゃないか?」と、将来に託していました。

しかし実際には「治る」筈がなく、自分に絶望したり、自殺さえ考えたりしましたが、そんなどん底の中で、「死ぬぐらいだったらカミングアウトしちゃえ」と思い、仲の良い幼なじみの男友達に、カミングアウトしたそうです。その友達はスッと受け入れてくれました。

「最初のカミングアウトの反応がネガティブだったら、次はなかったかも知れない。幸いポジティブで、良い意味で興味を持ってくれたりしたから、今の自分がある」

網谷さんは語っていました。

最後に、最近とある議員がツイッターで、「LGBTは生産性が無い。理由は子どもを作れない



いから」と発言し、ネットで炎上しています。同性愛を否定する切り口は、大抵「子どもを作れない」で、「だから社会に貢献していない。生産性がない」と来ます。その視点に説得力があるとは決して思えないのですが、いろんな人のツイッターを見る限り、議員の発言を同調する人のほうが多かったので、そういう風潮に対しては危機感を持っています。

第二部：パネルディスカッション

ここからは4人の障害当事者の方が、自身のマイノリティについてや、カミングアウトにまつわる思い、エピソードを語って下さいました。

①姜博久(かんぱく)さん

姜さんは脳性麻痺で電動車いすに乗っています。また、在日韓国人です。身体的には、車いすに乗っているという時点で、或る意味カミングアウトしていると言えます。

他方、在日であることについては、元々姜さんは日本名を名乗って生活していました。本名を名乗るようになった切っ掛けは、障害者運動に関わり始めたことです。運動に加わって最初に与えられた課題が、在日韓国人であるために年金をもらえていない障害者がいる、という問題に対して、自らの名前もあげながら訴えていくことだったのです。

在日としての差別問題に、日本名を名乗りながら取り組んでいくのは筋が通らないと感じ、本名を名乗ることに決めました。周りに障害者運動の同志が沢山いたことが安心材料となって、姜さんは「在日である」ということをカミングアウト出来ました。

ところで、今では車いす生活になって長い姜さんですが、元々は自力で歩いており、歩行障害があるという状態でした。その時の姜さんは、自らを障害者だとはあまり実感として思っておらず、寧ろ「もっとちゃんと歩かないといけない。もっと普通に歩かない」と思っていたそうです。

電車に乗っても、少し混んでいる時は無理してでも立っていたり、小さな子どもから歩き方について何か言われるのを怖がったりしていて、曰く「健常者という幻想にしがみつこうとしていた」。

それがいざ車いすに乗ると、自分でも障害者であることを、言わば指し示して歩いていることになり、意外なぐらい気が楽になったということです。

ただ、車いすに乗ると、「車いすに乗っているのだから絶対こうだろう」、「車いすの人は全員こうだ」という、決め付けや偏見を持たれることもあります。

自分が本当にやってほしいこと、やってほしくないことを伝えづらい場面は少なくありません。そういう意味で、カミングアウトした時に、世の中とうまくコミュニケーションを取れないと、いつまでも偏った見方をされるのではないかと思っています。

最近、相模原事件や、在日へのヘイトスピーチの問題を通じて、障害者としても在日としても、怖さを感じています。一番重要なことは、カミングアウトをしたあとの、世の中とのコミュニケーションの取り方なのではないか？と感じています。



②瀧本香織

瀧本は先天性多発性関節拘縮症という障害があり、電動車いすを使用しています。

20代前半の頃、インターネットのSNSで仲良くなった人と、実際に会う機会がありました。SNS上の自己紹介では、瀧本は自分の障害のことは書いていませんでした。

つまり、仲良くなった人は瀧本に障害があることは知らなかった訳ですが、実際に2人が会った時、瀧本の状態を見て相手の人は一瞬驚き、その直後に不機嫌になってしまいました。それっきり、その人とは会うことは無く、瀧本さんはその経験を機に、自分のプロフィールに障害者であることを書くようになりました。

やがて、また違う人と仲良くなり、その人と会ってレストランで食事をしました。その時は、自分が電動車いすを使用していることを相手も知っている、という状態で食事に行ったのですが、瀧本は電動車いすに乗ったまま食事するのはやりにくいので、座席に移るようにしています。そして席に移るために一旦立ち上がったところ、相手に思い切り驚かれたのだとか。

きっと、「車いすに乗ってる人が立ち上がる場合もある」ということを、相手は想像出来なかったのでしょうか。その場で、思いがけないカミングアウト劇になったという、エピソードでした。

「車いすの人は立ち上がれる訳がない」という思い込みは、結構多いようで、或る時はスポーツクラブを利用しようとして、手続きをするために車いすから立ち上がったら、支配人に引っ繰り返るぐらい驚かれた、ということがありました。

③根箭太郎

根箭は、広汎性発達障害・ADHD（注意欠陥多動性障害）・適応障害と診断されています。

診断されたのは2013年12月で、40歳の時でした。現在では障害名の表記が変わって、自閉症スペクトラム障害、ASDと呼ばれているそうです。

診断を受けた切っ掛けは、13年の10月に自分からメンタルクリニックに駆け込んで、「診断のためのテストを受けたい」とお願いしたことです。

初診で面談したあと、「自閉症スペクトラム障害の可能性が考えられる人」対象に配る調査票（質問票）に回答し、IQ兼心理テストを受けて、その結果「疑いの余地無し」と診断が下りました。つまり、自ら障害の診断→カミングアウトを望んだということなのですが、それまでは一応「健常者」というアイデンティティーで生きていた根箭が、何故診断を望んだのかというと、背景にはその当時の、業務環境を巡る大きな変化があります。

2013年度から障害福祉の制度が改正（現制度に）され、それまで根箭は、自立支援センターで相談支援専門員も兼ねて働いていたのですが、専門員という職種の指す業務内容や業務量・種類・義務・責任が大きく増え、複雑多岐化して難易度が上がり、同時他機関と絡む必要が出てきました。



これは根箭にとっては「環境の激変」で、到底適応出来るレベルではなく、「健常者」というアイデンティティーでは最早生きられなくなったことから、駆け込み寺に入るかの如くメンタルクリニックに行きました。実際に診断が下った時は、発達障害の人はよくこのように感じているみたいなのですが、「ホッとした」、「肩の荷が下りた」、「気が楽になった」と、言わばポジティブな気分になりました。職場には早々に「カミングアウト」をしました。そして、その業務の複雑さ故に、職場なりに少しでも根箭の負担が軽くなるよう、ケースの割り振り等、配慮をしたのですが、ケースというのは、実際に動き出してみないと分からないという現実もあり、当初の想定とは大きく離れた動きや状況になる場面が多々ありました。多数のケースで同時に想定外の動きが起こり、担当である限りは、その全てに対応する当然の義務がありました。

通常の仕事環境だと、例えば一つの職場で直属の上司に指示をされて業務をこなす、というような解りやすい構図になると思います。しかし根箭の職種の場合は、確かに一つの事業所に属してはいるのですが、実感としては、外での色々な他機関や、ケースの対象者・家族等から成る「システム」に所属しているという状態で、言わば「システムが職場」でした。そしてその中で、全体像を一番把握していて、年数的にも一番発言力のある人が上司、そしてその人の価値観が標準、という認識でいたのです。「システム」というのは、根箭の目線にはすごく定型（発達障害の無い人のことを定型発達者という）の社会人で、定型のキャリア人で、というように映りました。

従って、例え根箭の職場という「箱」の中で、色々な配慮や支援がなされたとしても、外の「システム」に出れば、そこでは全然空気が違っていたり、ペースや感覚が違っていたり、というのがあって、根箭も飽くまでも「肩書き」として見られるので、下手に「根箭自身」というものをカミングアウトするというのは、言い方は妙ですが、空気感的に無理そうだという感触だったのです。

寧ろ、肩書きに適応するために、カミングアウト禁止令・障害受容禁止令を自らに課し、飽くまでも業務環境への適応を目標として、職務に励もうとしました。

根箭はマルチタスクが大変苦手ですが、それでもマルチタスクをこなし続けることも適応なので、苦手なことをちゃんとやろうと思いましたが、その後、配置換えが行われ、現在はピア相談員として、根箭が障害当事者であることは法人の公式サイトでも紹介されるようになりました。

現在はかつての肩書きから解放され、自分自身を受容する姿勢も持ちながら、日々の社会生活を送れるようになっていきます。

最後に、第一部で講演して下さった網谷さんが、「バブリングでは、普段は「見えない属性」に対する活動をしているが、今回「見える属性」の話も色々聞けて良かった。カミングアウトとは、世の中の当たり前とか普通とか常識とか、人の善意みたいなのが膜みたいになっていて、その膜の存在ゆえに、当事者がカミングアウトしなければならなくなるのでは？」と結んでいました。

講師・パネリストの皆さん、参加者の皆さん、猛暑の中、本当に有難うございました。

NPO法人バブリング公式サイトへのアドレスはこちら↓

<http://npobr.net/>